「地球研言語記述論集」第 5 号
序文

大西 正幸

この 3 月で、言語記述研究会が開始してから 6 年が経過し、地球研記述言語論集は 5 号目となった。地球研では、昨年の 3 月に長田さんがリーダーだったインダスプロジェクトが終わり、メンバーは四散した。4 月から私の生物文化多様性プロジェクトが始まったので、記述研は私のプロジェクトが引き継ぐ形となったが、まだ予備研究の段階なので、地球研で定期的に研究会を開くこともままならない。そういうわけで、今年 1 年は研究会もやや低調であった。

今回の論集は、鈴木博之さんが 2 本と、倉部慶太さんと仲尾周一郎さんが各 1 本ずつの、計 4 本の論文からなっている。本数は少ないが、いずれも力のこもった論文である。例年通り、これらの論文は、研究会で議論され、その後 2 人ずつのメンバーによる査読が入ったあと、今の形に書き上げられている。

今回は、本数も少ないので、個々の論文の紹介だけでなく、私の感想も簡単に付け加えることにしたい。

鈴木博之さんの最初の論文、「カムチベット語 sDerong-nJol（得榮徳欽）方言群の諸方言における弱強型の韻律特徴と分節音に見えるその反映形」は、中国の四川省・雲南省に分布するカムチベット語の諸方言に見られる、二音節複合語の音節初頭における有気音の無声化と、初頭音節における母音 a の弱化という 2 つの音声・音韻現象を、「弱強型の韻律特徴」という概念によって統一的に説明しようとする試みである。統一的説明というのは、つまり、これら 2 つの現象のあるなしや、その濃淡、文法化の程度などが、各方言にどう現れているかということの緻密な記述と、それらの方言の地理的分布や複合語形成の歴史的過程などを合わせて検討し、こうしたことすべてを整合的に説明するのにもっとも合理的な仮説を提供する、という意味である。また、この検討の過程で、「弱強型」、「強弱型」、「指定不要」の 3 つの韻律タイプの方言があるという風に、仮説を広げている。

ところで、この論文のキーワードとなっている「弱強型の韻律」だが、これは音韻現象ではないため、音声的に義務的に第 2 音節に強勢が置かれるわけではない、と言う。（これとは逆に、「強弱型の韻律」をもつ方言の場合は第 1 音節に強勢が現れることが多いが、このばあいも義務的ではないと言う。）すると、循環論法に陥らないためには、本論で検討されている音声・音韻現象とは独立に、自然発話の中でこの韻律特徴がどのようなかたちで現れるかについての具体的な記述が当然必要になってくる。また、この現象が通言語的にどの程度一般化できるかについても説明があるとうれしい。今後の検討課題としてほしい。

2 番目の論文、「チベット・ビルマ系諸言語における“唇歯母音”」は、いくつかのチベット・ビルマ諸語に見られる、音節核を形成する唇歯摩擦音 [ɣ̩] の、調音的な特徴の詳細な観察に基づき、その区別を正確に記述する新たな音標表記の提案である。鈴木さんによれば、調音上の区別として重要なのは、調音器官の接近性ないし摩擦性、円唇性の有無、そして調音時における舌の位置、の 3 点である。そして、特に最後の点について、その区別を行うことに言語学的に意味があることの例として、この区別が雲南省北西部の諸言語の歴史的関係に新たな知見を加える可能性があることを指摘している。緻密な論に思えたが、私は、ここでも、唇歯母音、あるいはもっと広げて子音的特徴をもつ母音の音声特徴などが、通言語的にどの程度一般化して記述できるのだろうかと考えざるをえなかった。これもぜひ、今後の検討課題としていただきたい。

倉部慶太さんの論文、「ビルマ語の受動構文」は、彼の卒業論文を改訂したもので、名詞化接頭辞 ʔă- をとる動詞と述語動詞 khàɴ 「受ける、耐える」の組み合わせによる、ビルマ語の受動構文の 1 タイプを、形態論、統語論、意味論、談話の観点から詳細に分析したものである。論文は、まずこの構文の全体と、各構成要素の、形態統語的な特徴の記述から入る。次に、受動構文が「被害」の意味を表す場合と「利益・恩恵」の意味を表す場合とを、名詞化される動詞の意味タイプとの組み合わせによって分析している。これに続いて、ʔă-V 名詞が名詞化接頭辞 ʔă- の脱落を許す音韻、統語、意味条件を整理しながら、受動構文のヴァリエーションを論じる、この論文の中でも最も詳細なセクションが続く。そして、最後に、この受動構文の意味的・統語的特徴を整理したあと、Shibatani や Dixon の類型論的な議論の中で受動構文を典型的に特徴づけるとされる 3 つの談話機能についても検証し、そのどれもがこの受動構文にあてはまらないことが指摘されている。

倉部さんのデータの豊かさと分析の網羅的なことはいつも通りで、この論文の記述的な価値を高いものとしている。私は、4 の、動詞の意味分類と受動構文全体が表す意味の記述に、特に関心を持った。受動構文が表す意味を「被害」と「利益・恩恵」という観点から捉えると、意味的に中立的な動詞との組み合わせの場合に「被害」の意味を表すことから、構文のデフォールトの意味は「被害」である、との倉部さんの分析が最初にある。だが、動詞の分類を見ると、動詞自体の意味にすでに、対象に「被害」や「利益・恩恵」を及ぼすことが含意されていると思われるものが多数あり、その場合、その意味が構文にあるのか、それとももとの動詞にあるのかは、簡単には決められない。こうした点を緻密に検討すれば、動詞分類も構文の意味分析も違ったものになる可能性がある、という印象を私は持った。また、今後の課題として、ビルマ語における他のタイプの受動構文にまで、ぜひ分析を広げていただきたいと思っている。

仲尾周一郎さんの「南スーダンのことば遊び　―　「ルドリング」の類型論への視点　―」は、南スーダンで話されるクレオール、ジュバ・アラビア語の、10 代の話者の間に見られるルドリング（言葉遊び）の分析である。論文は、まず、この言語の、異なったプロソディーをもつ 2 つの語彙タイプの緻密な音韻分析から入り、その分析結果をもとに、ルドリングの音韻構造に関する世界の類型論的な研究の詳細なレビューを行っている。後半では、ジュバ・アラビア語のルドリングに、スーダン・アラビア語話者の影響による脱クレオール化から生じたジュバ・アラビア語の中層話体や、アラビア半島の他の言語のルドリングの影響があることを例証し、このような研究がもちうる社会言語学的・歴史言語学的な射程を示している。また、これらの言語の、ルドリングに近接した秘密語などの現象も含む、より総合的な研究の可能性に言及している。

この論文は、仲尾さんがクレオール語を研究対象として選んだ利点がよく出ていて、私には非常に面白かった。前半部の、2 つの語彙タイプのプロソディーとルドリング化規則との絡み合いの分析もそうであるが、特に後半部で触れたテーマは独創的で、大きく発展する可能性を秘めている。今後の研究の展開が楽しみである。

以上、今年号掲載の論文について述べた。

次号では、より多くのメンバーが意欲的な論文を書いてくれることを期待したい。

最後に、この 1 年間を通して、研究会の手配や論文の編集について尽力してくれた、稲垣和也さんと伊藤雄馬さんに、感謝の意を表します。

2013 年 3 月

大西正幸